



~ 13 冊  
2109  
12



2108  
12



扶来皇統記圖會後編卷之壹下

金窪義心贈于敵曹 瑞雲禪師化度安達條

宣軍ハ昨日の軍小數多士卒を亡ハ手負多を再び敵と伐分テ義勢カク兵糧も乏しくを京都(飛馬)分テ益々不覺と松(加勢)及び兵糧を乏しくする。然る小賊方の勇將金窪兵太戰場にて咽ハ流箭を受我陣小歸テ矢疵を療ぜしむれども急所あれを痛甚しく命生れども覺れを兵太士卒余れと昨日技取矢とを寄てるる小漆を以て大和國の住人廣瀬八郎勇と紀(た)兵太嘆息。此矢の玉の剛臆ハ知れども金窪程の勇士小矢を射中する武運小叶ハ者なり。矢東と見まを小兵も思れども高名之人余れも残念なりとて其矢小我著しる用と漆て即堂の中ハ心利る者小持せ此言玉皇の敵陣ハ遣くる其者京方の陣ハ往來内と乞て大将延福の前

小出某の金窪注兵太組下の者より主将兵太義昨日戰場にて咽み流矢を受矢  
を檢りし小廣瀬八郎勇と紀あり依て金窪程の者小太隻の手と肩せり高  
名と世上知せざるも残念小いむ。脚賞翫小いすゞ多し。名も暗む武士の本意  
小任せ受る矢小著せし兎火添て贈りたり此由脚中あつて其主(脚渡)給る  
かゝり慇懃小相演々れむ。経繩大い感。東夷ハ義も耻も知むとてつ小流石  
名小肩勇士とて之も優れ志感む小余あり。武士も人者むも斯くと有  
とこれと。即越古佐美が麾下小属せし廣瀬八郎と召出で金窪注が止と三日  
せ矢と兎を渡し使者小引出物を与へし兵太とて金窪の膏女を渡して帰  
されり。其後矢と胃と取寄てんる小。実も皆比深小射ると見えて矢比血小  
流り。次小胃と提げし見ると小。大剛の者の著せし兎とて甚が行目重く容易  
揚がらるれむ。愈感心ありて廣瀬ハ褒賞うと太刀一振与られれむ。八郎押頂

涙を流し。金窪注ハ万夫不當の剛の者と承りし。斯程まで武道の義を重ん  
むる者ハ思ひも其身の仇る某の高名と人小知せんとて。此二品を贈り心の注  
さ真の大丈夫とハ金窪注の要ふく碌くする某の不及とて小いれむ。此二品ハ  
子孫(緒州)の種小清いむ。脚褒美の脚太刀を恐おし脚及進しをり其故ハ  
全く其金窪注を目當小射る矢もて無之只敵の襲ひ来り或防かんや放し  
し矢が不測小金窪注小中いひ小偶然の手柄ていへむ。真の高名とハやがごと  
辞退して退れり。此廣瀬も又心ある武士なりと皆俱小感。大將経繩ハ今  
度の敗軍小就し熱思惟せれり。何分敵ハ地理小精く。味方ハ土地不安内小  
て奇兵を用る小不便れむ。何半心利する國人を召抱むと。專し其人を求め  
られり。茲小奥州の産小安達八郎とり強盜益有る。元ハ當國信夫郡の農民の  
子わりたるが生得力飽まで強腕と好む心放蕩して農業を嫌ひ十四五才

の頃より父母の家を出て悪徒の群小入あるも悪業を行くは強力なる上り  
馬市物の業も達しを悪徒ども八郎伏徒する者多し八郎遂に強盜の  
巨魁となり。緒方の富家へ推入る金銀財宝を奪掠り深山小巢穴を構て  
住居する其名隣國まで隠れし伊治此に官安達を度味方招け  
ども八郎是不應せども只却盜を更うて世と怒り送り多し一時配下の賊徒を  
將信夫郡山村の御たる豪民の宅へ押入る此家の主所の吏官の縁者  
はらるる由（其方へ人を走せ盜賊の押入る由と告ぐ）吏官即時小下吏及び村  
の腕を好む若者大勢集て近着折しも十五夜小月明あれ緒小下知  
して盜賊を追拂んと志する小安達八郎小高た所床机を立腰かけ螺  
吹せ太鼓を打せ其身は採を揮て小賊小令と傳る更恰も老練の軍師の士  
卒戎指指する小異あをど進退よく法小合て間小髪を容れれ吏官の手乃

者散く小捲りしこれ這くの体小退内八郎十分小財宝を奪取一声の  
螺を吹鳴を相圖として群賊を班り徐くと引取て己が柵へ歸りたるは賊の世  
小布なる強盜ひりたり。茲小魚洲の國府小近た所小觀音寺と号する梵  
宇有るが其任侶を瑞雲禪師と呼り道德高た僧あり緒人信仰し。藤  
原継繩も在陣中折り觀音寺へ参詣し。瑞雲禪師の教化を安探し。尊信  
せり。瑞雲和尚一夜書見して居られたる小個の大漢入来り和尚向  
ひ礼をた。明貝某が七又の二十五回忌の忌日小當ひむ何卒脚吊小願りくと  
て徒者小持せり畏と寄十兩許の砂金と緒布五端を布絶物小て  
出りたる和尚是を見て心中小此男の風跡めて斯過分の布絶を引  
得む。盜賊など中と疑ひ色小見む其とくと殊勝なる更なる僧  
の役なれを吊て進む。但し七者の法名何と影向。絶至の名何と紀を登れ

目録 己目 會 言 自 二二

やと向まゝる小不亡父の法名を某不知いふと子細有て若年の頃又母の家と出て  
其死期も不知今年二十五年の年忌小當るまでいかに亡又母の冥福を  
ひし更もいふと。松も星霜押移り身も初老の齡小及小つた又母の思義を  
思ひ今までの不孝八悔て及せり其年忌を吊るゝ和尚の高徳を史傳  
今夜御頼やさんら推忝しんわりと語る。禪師も松を御身の名斗わり  
とも度帖小記しやさんと言れを大漢當時思惟し。さうを安達某と記  
し冷るるぞと言るも松を禪師も社凡庸おじと思し小果て國中小隠と  
あれ劫盗安達八郎有て有ると覺あがら左あぬ体して施物を収め本堂へ  
伴ひ烟ろ小徑を續編し吊ひの佛更終りて後方丈へ猪と湯漬を進めたと  
一談話の序小禪師安達小向い貧道へ出家の義あれを万更心更に物語り  
り又御身の風跡武家とも見えず。市人農民と尚思われを由ある方小こと。今を

包む御名と名告られいとやされぬを大漢が曰某幸ひ有て今夜善知識小見  
なる上ち罪障懺悔のころ名告いぬ。実ハ安達八郎と不良業と為者小  
穴賢他の人小某が名を漏しゆすと口止りたる。禪師點首争り余小洩しぬ  
れ拙僧も安達某とやされ時より夫とハ推量しや。此佛場へ来らば佛縁乃  
深れとろかれ拙僧の愚業と演いぬ。凡世上の人小初より不善人ばかり皆若  
年の血氣小任せ悪れ友小交り其所為小做ひく何より惡道へ入無量の罪をも  
造るなり。人間の一生小百才を保し稀あり僅ある夢の世を送んとてあざろ英雄乃  
身と狗黨の群小沈め。人を殺し火を放ちて暴悪の名を遺されん更久しくも  
朽惜れ御辺の勇智と以て公小事へ國家の為小忠戦を勵まれあむ帝王の爲  
小ハ忠臣と賞せられ又母先祖の為小孝道をねる。美玉を泥小埋むハ皇  
るるを更あむと理を揚げて教化ありを八郎感伏し。実ハ難右御教示

三十一  
二四

小預り迷の雲霧霧の某若年の頃何の舟もあく放逸橋奢と好妻と思  
親の諫め世の緋をも厭む悪友小誘れく竊盜を業と遂小其巨魁とわり  
人の財宝と奪掠めく僅小口腹を富せ更今更慚愧不堪いされも今ハ  
偷次皿の名を通る小道なく奈何も致難れを悪と知ども悪をふり只刃  
の首小控を待のふい和尚の大慈悲小因て公儀の下吏も用ひらる道い  
り大馬の旁と辞せども奉公いごとをいれ誠心面小見られて言々も小と禪師大り小  
感いさる存念あを万更拙僧小仕きれい為悪く計り先哲時當寺小身  
を忍びて居らるるいと夫より安達を舎藏置翌日征東使継繩の陣所へ  
到り密小對面して當國小隠か安達八郎と中強盜の首領のいが亡父の口  
を頼んと拙寺へ参りいれ其器量と弑し見小人表衆小勝を膽略すも秀中  
は竊盜をかすむる者あをい依て種く教化いれを渠も生涯拘黨の群小柄

果人更と厭ひ今までの悪業と悔い罪を赦し召抱る主君あを大馬の旁と  
辞せども奉公とむれすやい君兼て當國の地理小熟せ者あを召抱り  
御中あれ彼安達を扶知り更渠ハ偷盜を業といひ也當國ハ小及と近國  
の地理あも達し物も智勇と兼備せ者あをいれ自ら軍功を立すも便と  
も成い布いと勸められ継繩大り小悦是予が兼て望む所なり其者先非と改て  
予小奉公とむるどあを予と其功小従ひ追く執立遣をせむといは  
尚始び歸て安達小右の由を告夜中同伴ひ継繩の陣館へ赴死八郎を見  
せれを継繩安達が堂たる骨柄をて深く悦び至從の契約せれも安達  
三拜と目と謝し山塞より老母と迎より小賊の中あて物の役小立むる者ハ呼りて  
家人より是より非と改め家人を以て近郷の盜賊を防がせむるを國府の近邊  
盜難の患ひなく緒人大り小心を安んども悦ひたる

桓武天皇御即位 苦肉計畧安達燒敵柵條

宝亀十二年皇都小伊勢の神官より表を捧げ當春より存宮の社の上五  
彩の雲現れ四方の天小耀れいと奏上りたる帝歡慮慶く百官を召集す  
ひ今般伊勢の存宮小五色雲現るる是天より祥瑞を示しむと云ふ  
年号を改め天應元年と改元す下。然む五穀もよく登り東國の賊徒も程か  
く殊小休むを。然し此儀如何有べと勅問ひしを左右の大將先く一應  
の月卿雲客冠を傾けく下小拜賀し。陛下徳を脩め万民を恤めよ。天  
より祥瑞を示しむるを年号改元の儀緘小宜くいと回奏しむる小より。帝も脚  
喜悅在り即ち宝亀十二年正月小天應元年と改め玉ひ天下小大赦行れ囚獄を  
赦し放し遠嶋配流の者と徴還されむと。万民皆君の御仁徳を感悦し世は何  
となく賑ひたる時小帝又群臣を召集り紹在るる。昨年奥州より加勢兵小兵糧

を乞く由(兵糧の儀)東八國(觸渡)加勢八藤原小黒大呂小命し三千余騎を  
授けく東國(下)たる小黒大呂途中病小深引返せり。別小加勢の大將たる  
人を選ぶ。いよ其機小當ぶれ者を得む。且朝勢繁く宇下く時日を授  
せり。然小黒大呂疾病平愈せり。由かれを再び小黒大呂小節持せ三千騎を授  
て。奥州(下)向せり。坂東八國(兵糧運送)の遲滞を責め。兵糧を送る  
命れす。下渡すと下り。緒臣下謹で勅詔を奉り。即ち藤原小黒大呂を重て  
持節征東大使と。三千余騎を授けし。小黒大呂奉りて天應元年二月都遷  
足と東國(下)向り。禁廷より東八國(昨年)の忘り。我々。大急小奥州(兵  
糧)を送る命し。觸渡されむ。由(八國)の輩大急。此處。急小兵糧をよ。綱  
國より奥州(運送)し。斯て都中光仁天皇天應元年三月初の頃より。肉  
不例小。そのひを。朝政を聞食も懶く。思召三公九卿と脚拜儀あり。密

位を皇太子山部親王に譲らせり。是を皇太子の天子桓武天皇と申  
奉る。即ち御即位の大禮を執行。孔伊勢太神宮(勅使を以て)御受禪乃儀と  
告まされ。御弟皇子早良親王を太子ふまじり。内大臣藤原魚名と左大臣  
ト。此頃ハ左右の大臣を並ぶられ。左大臣右大臣一人して政を執行。大  
納言一人。是ハ相副く。政事を佐する。也。抑桓武天皇と申さる。御禪ハ日本  
根子皇統。珍照尊光仁天皇弟の皇子。御母ハ高野夫人と。高野乙姫の  
女なり。桓武天皇ハ天性御孝心深く。又儒学と尊び。佛法信じ。也。是も御大量  
小く。勇氣厲く。武臣と滅て。弓馬兵法を勵む。学めり。其進む者と登用。其  
急る者と擡げ。以て。名君を。奥州在陣の緒将の怠慢を責火急小功  
成。之を。勅書と。征東使と。下され。却。奥州在陣の緒将ハ都より加勢を  
も下され。兵糧を送られ。如何なる故。と。時。集會。評議。する。乃。

小く賊徒。殊伐の儀。八須更見合。々々。此。皇。京。軍。心。不足。と。心。計。日。夜。徒  
黨の悪徒。指揮して。近郡遠郷を侵し。掠りませ。己ハ美女と。近者酒宴遊。兵小  
恥り。憚る所なく。歡樂と。究る。去程。小。宝。龜。十。年。も。暮。明。且。不。改。え。あ。て。天  
應。元。年。と。かり。三。月。下。旬。小。藤。原。小。黒。大。名。加。勢。と。て。三。千。騎。を。將。て。着。到。東  
八。國。より。追。兵。糧。を送。り。々々。緒。大。將。士。卒。を。大。小。勇。と。悦。び。銳。氣。を  
生。ぜ。る。者。を。此。上。之。命。と。抛。て。賊。徒。を。殊。伐。大。君。の。宸。襟。を。安。ん。じ。ん。と  
改。め。軍。勢。を。調。煉。日。々。集。會。て。専。ら。合。戰。の。評。議。を。所。日。月。中。旬。桓  
武。天。皇。の。勅。書。を。捧。て。勅。使。下。着。有。れ。緒。大。將。士。を。是。を。迎。請。し。る。勅。使。先  
新。帝。御。即。位。の。嘉。儀。と。演。次。小。紹。書。と。出。し。續。史。し。る。其。文。小。曰  
征。東。使。小。勅。使。等。延。遲。し。既。小。時。宜。を。失。以。將。軍。等。發。起。し。て  
久。く。日。月。を。延。る。集。る。所。の。步。騎。數。千。余。人。加。勢。賊。地。子。入。期。を。奏。す。



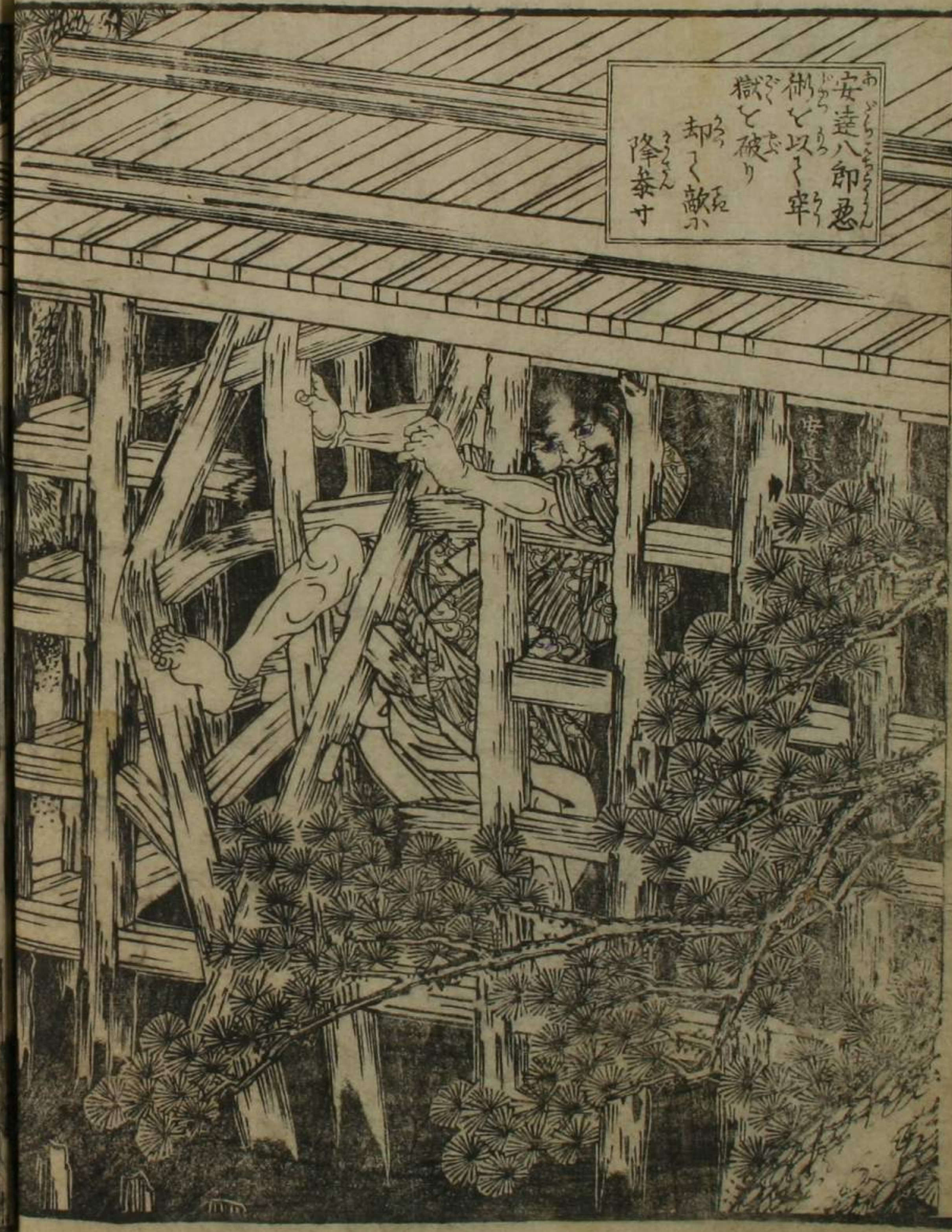
事度多し計已らむ狂賊を平珍まじ。而も夏八仲茂り征討まじ  
との冬ハ雪深く殊伐ぐ。其を則ち何の目も賊を殊一國を復ん  
方小將軍等賊の為小欺れ緩怠し。此逗留を致し。人馬瘦て何を  
以て敵小對せん。良將の策豈如此あらんや。宜く教諭を加へ意征討  
小存せよ。若今月を以て賊徒を殺尽すと更能むを退て多賀玉造の  
要害小籠り能防禦と加へ兼て戦術を練令すと云く

勅使勅書と續終れぬ。延繩以下深く愧恐を犯命畏り奉り。此上ハ軍略を  
定め不目賊徒を征伐し。勝軍と奏し。なるべし。間此旨御飯洛の上回奏か  
と申されぬ。勅使承諾し。玉造を以て都ど上られ。斯て延繩小黒と名と軍  
儀を定め。近日出陣すと。其手賊をかり。多小忍も。不時の故障出来し。其  
其根元を尋る。小彼賊首安達八郎。延繩小奉公して。初の程ハ身と疎り。釘を

早して諸吏慎む。勤められ。延繩を首と。諸士も是を答々。小その  
頃延繩の武庫小藏する。金造の大刀并小秘藏の甲冑小紛失し。勤  
番の者大小孩丸主君。斯と訟られ。延繩其怠り。叱し。儲言々。是外  
より賊の竊入。次取。小あ。予が麾下の者の所為小疑ひ。内小穿  
鑿を施し。又國岳源吾小内穿鑿金の更を命。依て源吾種。手と  
廻し。其盗し者。穿鑿とれ。維が所為とも。知ざり。然小安達八郎が家  
人。日大酒を過。酔狂して不法の義を。八郎大。怒り散。小  
懲。衣服を剥赤裸。白昼小追出。其者大。死。其。國岳源吾  
が。内。入。妻の。言。源吾。出。下。即。覺。者  
髪と亂し。赤裸。肩背血。汗。甚。子細。向。頭。小  
中。密。上。言。小。異。人。を。拂。何。妻。小。向。其。者。声。低

先達て紛失の事なり。脚太刀甲冑亦と安達八郎が次取ていかり。此義我より外お  
知者なり。子細有て辨人仕るわりと言々多小ど。源吾孫丸先其者と。苗置急死  
延繩の前へ出て右辨人の言「趣を然へんが急死其者と呼寄よ」とて召出  
延繩自ら辨人ふ向ひ何者乎て八郎が武器を盗」とりや。其證據あり  
やと尋られぬ。彼者答て小吏の安達八郎が千の者ふ。彼八郎脚内小召抱へ  
られ表忠実の体ふんせし。心尚以前の賊情止む。且強酒美食と好むへ  
脚扶知方小の難費足とさる。忍術を以て武庫へ竊入。太刀武器亦と盗と取敵  
方の者小賣渡し。小吏よく見届せぬ。中々延繩賊一々と思ふ。斯慥ふや  
上とて先辨人を物産ふ忍せぬ。安達が方へ使を立軍警ふ。就て急小高紙と  
死更あり。只今来る。死」と言せられぬ。八郎承り。即ち使者と曰道。大  
將の陣へと忝りたる。延繩安達小向ひ。予が武庫へ忍入秘藏の太刀甲冑と盗取

八郎ありと慥なる辨人あり。你身小覚あり。やと糾問せられぬ。八郎少も動さる色子  
く。是ハ思もやぬ。脚控も。某只盜賊の業をなす。観音寺の長老の教化小  
預り先非と改り。君小脚奉公。過か御扶知を頂戴仕り。何の不足有て  
君の脚秘藏の武器を盗む。賊宝を得んを欲し。富有の民家忍び  
入る。思入小盗取ん。更いと易く。且非を改む。上六偷盜の業ハ敢て仕す。小  
と明泉陳謝。一々小延繩。亦有死と思れられぬ。彼辨人。予所も據あり。小  
あむとて。八郎を苗置數人の武士と。八郎が部家遣。苦物も。公尽く。搜し。檢  
めさや。むる。小果と。胃と。畏し。給太刀の袋。か。右々。即ち取て。延繩。小呈  
一々。延繩。後丸。斯て。八辨人。予。如く。八郎が。盗取。小疑。な。とて。帷幕。の。後。小力士  
を隠し。置備。安達。を呼出。右の。證據。を出。と。結問。せ。られ。ぬ。八郎。大。小。疑。な。り  
体。赤面。し。以。討。む。わ。く。免。首。々。小。延繩。扇。を。投。て。相。圖。を。な。り。々。小。幕。乃



安達八郎忍  
御と以て牢  
獄と破り  
却て敵  
降参寸

皇朝御代御事

そはより十余人の力士頭を出八郎を捕て伏高平小と縛り多。継繩怒り八郎を捕と  
睨とやあれ八郎你先非を改めしこのを以て予が家人小君抱いませす功もあれ小過  
分の扶知を与へ小其恩義も不顧ヲテ重器と偷取て賊軍の手へ賣渡し割  
さへ横舌と翻して予を欺んこする条言路道断の曲者なり。今此燈檠を見ても尚  
陳綱の釘ありやと罵り有合ら杖を把て面部肩背のちちちカカ任と散く小  
撃をれを忽ち小髪質の上列衣て鮮血逆り流き多。継繩尚も勃怒止む。渠奴今  
殊戮とべれれども。近日賊徒征討の出陣とべれも。其時軍神の血糸小首と剣下  
これ道と獄屋へ緊糸を置厳く番と付て守りもと命せられカカ士命と領し  
安達を曳きて牢獄へ入れ西三人の番と付て守りも。安達八郎八元来忍術と  
熟煉し多。其夜且満願幻術を行ひ番卒と悉く眠らせ牢と押破り跡  
暗と逃失く。夜明て番卒とも眼を覚し獄中をえれ。格子破れ八郎八早

抜出と覚く影も見えざれを大少該大將へ斯と訴れを継繩大少怒り疾小  
も殊戮とせらる。奴を千延小と逃失させど安うね此上ハ渠が老母を捕て  
未とよとて武士數人遣され多。早老母も逃退て行方知るも。一手と空りて地  
うの其由言上り多。継繩信怒り。安達八郎を生捕り又と討取て首と出す者  
小ハ重く賞金をよめんと高札小記して所小立嚴く其所在を穿鑿せれ  
り。却説安達八郎ハ獄屋で破抜出。其夜老母と持て退母を知音の者小  
預けみれ己と伊治此子名を捕へり。對面を乞て曰某ハ安達八郎と呼多。者小  
い子細有て京方の大將継繩が招た小應。新小其麾下小屬し。此頃武  
庫の太刀甲冑亦紛失せと絶者口小うけれ。継繩不明。理不及小其。盜取  
小定め。脚覽の如く面上小痕。皮をよめてお擲。己小獄小下り。斬罪せん。せしむ  
忍術を以て牢と抜出。継繩を討く無念を暗きんと思ひ。いも障有て本意と

遂に所詮自力にて討つるを御手不かり近日京軍の押寄いんを懸て  
継繩を討つる憤を散れ推忝といかり是れを度くの御招れ不慮せざる  
罪を御赦免有て歩軍の末不加わつる大馬の勞と錫し忠戦を励むる  
と約を申て頼とれを世に名行腕と頼し金窪兵太八失痕のよふ小死  
膽沢悪太郎此頃瘡疾小引を驚くるあり力とあるを勇士もかと思し折  
しも多羊懇望せ安達八郎自身幕下小属せんと望るる由大不悦び儀  
も及ぶ降を容し酒宴と催して重く管侍し宿京軍の強弱を問われ安達  
答て京軍八昨幸阿隈川原の二戦も少負多兵を折る御勢の武勇小怖  
再び戦ふ義勢なり其上長陣も退屈し只帰京せん更をりと思ひて戰場向ん  
更と望む者十が二もなき由も當年都より加勢とて藤原小黒上名三千騎  
を將て地加りの近一軍せん押寄いぬ然も大将八皆公家長袖小く

兵學机の上より関すの戰場の場敷を踏しゆもあも軍勢とも晋代思  
顧の者八解く多く公の募不應し集勢もて命と抛ち敵小向んとする程の  
士卒八稀小いまる地理を知らず奇兵を以て是を伐ん勝どと更有る  
むと赤舌淀とわく鏡を此名深く悦び再難得と思ひ當座の引出物と  
して太刀甲冑引馬ホと子是より軍議の行相手と萬更安達と高懸しとど  
かり小々の官軍の大將継繩小黒九賊徒征伐の軍議と定め今度八大手搦手  
両方より攻立一本小搦破んと大手八大伴益立と先陣と小黒九後陣とかり惣  
勢五千余騎搦手八紀古佐美と先陣と継繩後陣とかり惣勢五千余  
騎天應元年九月十二日未明より玉造城を攻立此名石名搦押寄り此名石  
も渡より京軍の軍と知れを二千五百余人を大手搦手小多大手の防八大将此  
呂栗原源三千二百余人して固り搦手八安達八郎松前荒野一千二百余人あ

守りたり素り切所の山上小構へ柵して左右に老樹蔚茂とて狐兎も強りぞ大車  
搦手小櫓高く建たせ大木大石を積貯して旗の竿と風小靡く究竟の射入鏃  
を揃へ敵寄来らば微塵小せん待付けし去程小官軍大車搦手一呑小金鼓  
を鳴り喊を共曳く声で攻登る先大車の坂手より大伴益立が先五五人  
持槍を被れ連て柵際近く攻寄る小賊軍も岡を獲矢と射下と隻雨の如  
くす大木大石を鈎瓶けて投落しれを寄手是小辟易し人顔して引退く時  
小柵門とまると岡を栗原源三三百騎を率して撃て出陣と喚びおて下る  
小を大伴が勢跡山崩して坂下より逃下りくる賊兵はまてう敵を伐悩し手莊  
く勢を引上て柵中へ引入る大伴益立大勢の敵小後とんまると又  
や有と新兵を入替り攻登りしれも賊軍木石を投下し矢を展く射下し  
寄兵瘡めを伐て出高より捲り落しける也京軍兵と折く乃て何乃

仕出たる更もたけ攻徳んええより多の宿まき柵手向し古佐美継繩が  
勢も五百騎七百騎番手と定め喊を共曳く攻寄るも安達八郎初前の  
荒鰐木石を投矢と射下て敵に防が吏大車と等く寄兵疲るれを伐て出  
く強落し敵退けを長追せし柵けり城門を固て守りしる也此手も京軍  
手負死亡の者乃と多く敢て攻入吏能ふと猶豫て在る小申越過百頃  
忽ち此言を柵の内小黒煙り蝸巻上り火の午起りて柵中小騒動乃声大  
小せんとくも小柵手の大將継繩大音小浪波攻入ると下知しれを一千五百騎の  
寄兵一呑小喊を共曳く攻登り賊兵防んもせと却り城門を固らる也  
官軍潮の涌か如く攻込る賊軍の俄の出火小騒動防れ消人と騒が内小早  
敵勢攻入小を信強死借及忠の者有て敵を引入ると強立用障障  
とて敵と防んを者なく煙小喊火小燵きて狼狽惑と京軍無切不切て

三十九 一〇四 八

廻る更草と薙如し大牛の寄兵益々小黒丸も敵柵の火の手は見て敵方  
内変あるを察し一丁一千五百騎を進め攻登り城門を歩破て大浪の  
込入るるに未此日の及忠八別人ありと安達八郎が及間の謀針を  
一賊情の妻を以て継繩の怨を受牢獄を技出て此大黒丸降参し  
小陣小屋の火をけ寄兵を引入ると京軍といふも余も更不知り  
程小賊兵を前後より攻入敵小途を失ひ素り欲心の為小味サ野武士  
山賊原がれを我知恥を知る者一人もなき途を奪て逃んて討れ或  
ハ手束て降参するも有又と生捕るも多辛と柵と逃下し者も林小屯  
せし官軍小鈍と擒おせれ賊將此大黒丸味方の内変とて大黒丸怒り  
大太刀技挿し馬と跳して群る京軍と縦横無尽小斬て回り敵を斬  
果大太刀も刀も半折大牛と廣げく近付者と搔扱て人碌小赤丸小

あれ悪戦一多己小馬も射まめれて斃れを蹴立ちたり猶も敵中と  
狭回り士卒と怖し其身も矢疵太刀疵數多受合ハ是までなりと鏝と  
解て腹十文字小搔切ると安達八郎近末を終首とと揚小多此余  
栗原源三松前荒鯨以下の宗徒の者も乱軍の中小戦死此大黒丸妻女  
童六火中不投ド又と刃の下小入ると落し士卒亦或討死或六虜となり手小  
立敵一人も多なりを緒勢小火を防死消せ勝喊を揚付る者も點檢  
とる小千二百余級小及虜九百十余人焼死の者も數多とて去年一も  
官軍と怖し威を國中小奮し此大黒丸も運尽れを戦場の露と消堅固小  
構し要害も一時の煙と成ると哀なり是偏小継繩の智謀と安達  
が働小依ととなり斯く兇敵亡びバ継繩小黒丸軍卒を分て所  
一殘黨を搜し出して搦捕せ罪の重小依て死刑と追放し賊將此大

呂が股肱と頼り膽沢悪太郎を搦捕て首を刎宗徒の首の首を梟木に  
つけ一國平定せり。十月上旬征東使の面々諸軍を率て都へ凱陣せられ

東征使凱陣賞罰

不破内親王母子流罪條

征東大使藤原繼繩日藤原小黒丸其餘の諸將路次障なく歸京し  
参内し賊徒を伐亡し與洲平均せし趣を奏聞し之を桓武天皇太子  
感在し繼繩小黒丸古佐美亦忠賞を賜り安達八郎亦與洲の中  
菜地を給り今度忠戦の功を賞し又大伴益三六軍戦の期を愆りて  
寸功かたを処るひ其官位を削りしむる。去程亦與洲の國乱平定し緒  
人心を安んじし又都亦不時の珍叟出来し。延暦元年辛酉正月  
因幡守水上川繼隱謀を企其義露顯し召捕きて遠嶋へ隔せられ  
其上首趣を尋らる亦水上川繼と云天武帝の曾孫不當なり。天武帝乃皇

子小新田部皇子とあり其脚子と塩焼皇子とせしが去ぬる天平宝字八

年惠美押勝謀叛して塩焼皇子を取きて新帝と冊後楯となり軍

勢を驅催し之れも遂亦合戦亦亦負押勝討せり由へ塩焼皇子も連

累の罪して誅せられり其砌り塩焼皇子の庶弟申八称徳帝の脚妹不

破内親王と申其脚腹亦出生せり即ち川継なり其節ハ幼稚と云母を

天皇の脚妹と云母子とも罪科の脚沙汰なく都を退去して在る亦川継

漸く成長し其母と心を合内謀叛を企神社佛閣へ暗に称徳帝を兇

咀とも願文を収り朝家を乱さんとせし其隱謀露顯御公を擲せられ

川継ハ土佐國へ流されたり亦亦川継身の非義を改んともせし

さ亦亦無念不思ひあれし時節もかゝ待々亦亦光仁天皇を改元小純

と天下亦亦大赦を行ひし時川継も流罪思免あつて都へ召還されり



経君息と忝しと思ふも猶も帝と傾けきり已ま位と踐んかかろげぬ  
大望を企酒宴遊興小托せし月御雲容を我郎舎招け其心腹と試と  
一味荷擔させ兼て召抱一人の大家和乙人とて無双忍術の名人あり其者を  
内裡へ潜入せ軍勢とてひて不意小宮門へ押寄ると其喊声を相圖小内より御  
門を開きせんとて入込せりて人々忍術の達人なれむ三日以前より太刀刃と帝  
も衛護嚴禁禁閑へ潜入するも見覺る者もあらず仕とありたり  
と独咲し回廊の處小身と潜りて相圖を待たる天の君を謀りしもんとす  
天野小や頻小喚嗽出さるも強て喚を抑止んとされども喚止らむと堪ら  
我もも敷声喚嗽さるも林の中夜回りの衛士是を覺り只今の喚嗽ハ正  
しく廊下の辺小せえり此辺小人居るをわたりたりと松明を揮きて其辺を  
尋搜しるも小果と廊下の下の隅小怪れ人影見えん波や曲者

あれと夜回りの武士們曳出と擲捕んと生特たるこ人今逃まぬと心  
定め帯る太刀拔持て挑り出さるる武士と當と斬何れ以て堪るる真  
向より切割きて唾ど倒れ伏さるる是ハ狼藉なりと残る武士も亦拔連  
て切てくる人々死物狂と働かす又人を切仆し二人小手を肩せりこれ己の  
二テ所手と肩て踵くると大勢前後より取圍と太刀と撃落し兩脚を難  
してかり重り遂小高手小傳り上右司の廳所へ曳行有り始末と松は右司  
強丸即刺踏向小及びぐる小始の程ハ左右言終りて白状せりたるが度々の呵  
責の苦痛小堪らぬと上某賊ハ氷上川繼殿小奉公する者おて川繼殿  
當今と傾けしんと謀叛を思ふと明日の夜一味合躰の人々と謀りて脚  
所の北門より襲ひ入るの手筈して其ハ忍術小達とてひて兼て脚所中へ潜り入  
相圖次第小脚門を内より開けよとの下知小從ひ僧入る廊下の下小隠れ居り多

皇亮己圖會後清長二

と巧の次第残らざりて白状ふと及々是れ小依て有司具状を以て右の二件成奏し  
るを桓武帝甚く逆鱗在り先急小四方の禁門を固まらせ防禦の備を厳重  
にせしむるに備何気かれば体にて官使を川継の方へ遣はしめし御小評議  
更あれを疾く矢内とて言ひし川継ハ御使の来りて何となく心強  
れ是れ必定し人が更を仕損じ密謀露頭せし成りて早く推察し官使  
を領掌せし旨とて返し母公と俱ふる物も採あむ後門より路行人と  
る小兼て朝廷より自然川継が逃失んとする更もとて其宿所の四方小大勢  
官兵を伏せしめし川継母子遂に鈍くと虜とかり有司の廳へ曳き  
禁廷小し人を跨向と荷擔の輩と遂に白状させ其刻付て宇治王と先  
と公家武家とも川継小合夥せし輩と悉く召捕せし帝群臣と召集  
勅詔しし川継義先年隠謀と企更發覺して流刑小行れしと

先帝格別の仁恕を以て大赦を行ひし御川継母子が罪を赦して召還し  
し其天恩を忘却し今般も隠謀を企朕小冠せんとせし余重くの服科  
せし急度之般科小行し死罪者も先帝明御在りしと陵の土乾す  
朕中哀戚小堪む縁園小畫る折れを死刑の沙汰をあたふ心小依て川  
継が死罪一等と省り伊豆國へ流罪小處とせし其母不破内親王の身も  
一度あつて二度まで川継小逆意と勸り余是も重罪を死罪小行し  
るれれも川継が死罪を宥る上其母も死刑とせし川継が姉妹とて小  
淡路國へ配流し其餘川継小隱謀小荷擔す者も罪の輕重小因りて配所  
の遠近を定め流罪小處とせしと宣ひしを諸臣下領掌しし御小川継  
母子が二度の大罪重く刑罰あるゆゑ小母子も死罪と省り更重く有る  
御仁政多しと感嘆し川継を首より一味の輩と皆を流刑小行ひ依し人

皇元己圖會後高宗二十

衛士三人を殺害し、其余の者も手と肩を削られ、首を刎られ、噫息の  
くみ川継母子、聖王の御仁息をも、顧みず、再度及ぶる企てたり。數月心を場  
せし、隠謀一時小露顯し、再び配所の二卒となり、遂に死亡し、汚名を万  
代に遺せし、偏小天命、小逆に明君を謀むるんとせし、冥冥とぞ知れり。  
宇佐八幡宮詭宣元神傳 蝦蟇合戦怪異之條

延暦三年夏五月、豐前國宇佐宮の社司皇都(上)り、糸内にて奏聞し、  
小(先)頃八幡宮の御神純小我一切衆生の苦を救済せんと欲し、今(今)も  
我名を八幡大自在王菩薩と稱せし、と宣ひ、依て願く、御詭宣の趣を  
勅許し、給り、仰せ願ひ、まゝいとて、奏状を捧ぐるを、帝(天)聞は  
よひ、公卿百官と召れ、御評議の上、則ち勅免たり、多し。是(因)て社司(八幡)  
帝恩を拜謝し、も、豊前(下)り、是(下)り、八幡武太神を改め、八幡大菩薩

と稱す。更と八あり、抑八幡宮とす。も、八(十六)代(の)帝(應)神(天皇)乃(御)  
更なり、則ち仲哀(天皇)弟(四)の(白)子(小)て、御母(神)功(白)后(小)て、在(せ)り、白(后)皇(子)  
を(孕)り、の(ひ)あ(ぐ)三(韓)を(御)征(伐)あり、御(凱)陣(の)后(庚)辰(の)冬(十二)月(筑)紫(乃)  
敗(田)わ(平)易(と)白(皇)子(と)産(せ)多(し)、其(生)ま(せ)し、初(り)御(腕)の上(小)元(生)り、形  
鞆(の)ぞ(く)か(り)也、(豊)田(天)皇(と)り、是(即)ち(應)神(天)皇(と)在(せ)り、御(治)  
世(四)十(一)年(室)喜(辛)百(一)才(小)庚(午)年(二)月(十)五(日)大(和)國(旺)嶋(豐)明(宮)す、(崩)御  
か(り)河(内)國(古)市(郡)長(野)山(小)茅(り)も、其(後)八(皇)三(十)代(欽)明(天)皇(の)御(宇)  
小(初)く(御)廟(を)立(す)今(の)河(内)國(豊)田(八)幡(宮)是(なり)、欽(明)天(皇)三(十)一(年)の(冬)豐  
前(國)菱(形)の(池)の(辺)に(民)家(の)小(兒)小(つ)里(と)神(紀)あり、我(は)八(皇)三(十)代  
登(田)八(幡)九(才)也、昔(く)緒(國)小(垂)跡(し)、今(ま)此(地)小(任)を(死)たり、是(小)依(り)  
右(の)首(と)都(奏)聞(し)及(び)多(れ)を(即)ち(勅)使(を)立(せ)り、豊(前)國(小)八(幡)宮(の)宮(社)を(建)



巨魁と名がけたる色赤く篆書の如き紋ありて肥大なり。諸漸く小數多く出来  
りて幾万の人数をもちて始はるる人も無りたる小三人五人と寄聚り果は老若  
男女群集して是を見物し百般説をまきふむむる内小又東南の麓よりは  
く無数の蝦蟇追々出来りて境内小入東西小とれて列をまきまきおろ  
陣を張屯とあき小異あきど。凡二三丁の間東西の蝦蟇六七万小元満く。斯て  
緒人目も離さずと見物するうち小東西の蝦蟇声を揚て飛寄く入り咬  
合程小あひの半脚を咬きく血小流弱り果て這まも叶はざる他の蝦蟇来り  
て背小肩背最入もありあり。あひの其場小て啗殺さるるも有互小咬合てとも小死す  
るもありて一向軍兵の血戦とる小一般なり。緒人始は小珍れ小使小あひてあき  
入るが。後小入る目も痛く袖を覆て見得ざるも多々あり去程小東  
西の蝦蟇の咬合と二時むろふと漸く小別れ引退れ果は一足も残らざる無

かりたり衆人不思議の使小あひの末代はまらむ前代いさむさぎの珍使小あひ所  
こと多た小佛法最初の道場現世の極楽浄土と唱る御寺小あり奇怪  
ある使何き多兵乱あひの幾る前表小あひととり小絆論し。お小お目も蝦  
蟇の圃ひああると使傳する後早朝より天王寺へ群聚する使前日小十信一  
終日待暮せども其後ハ蝦蟇一足も出来らむ其辺の麓と搜し尋れども  
蛙一足も居ざりたるごとく不測とりゆ由疎かりたり

山城國長岡郡經營 早良親王誦罪愆條

桓武天皇平城の都と山背國小迂らなり。思ひ中納言藤原小黒丸從三  
位藤原種継兩人小命せられ帝城とせむ良地を擇ませり。西側勅命  
を奉り山背國へ互起東西南北を巡見らる小訓郡長岡の地と他所  
小勝とされむ此所とて皇都とす小最上ありとて地圖を寫して取

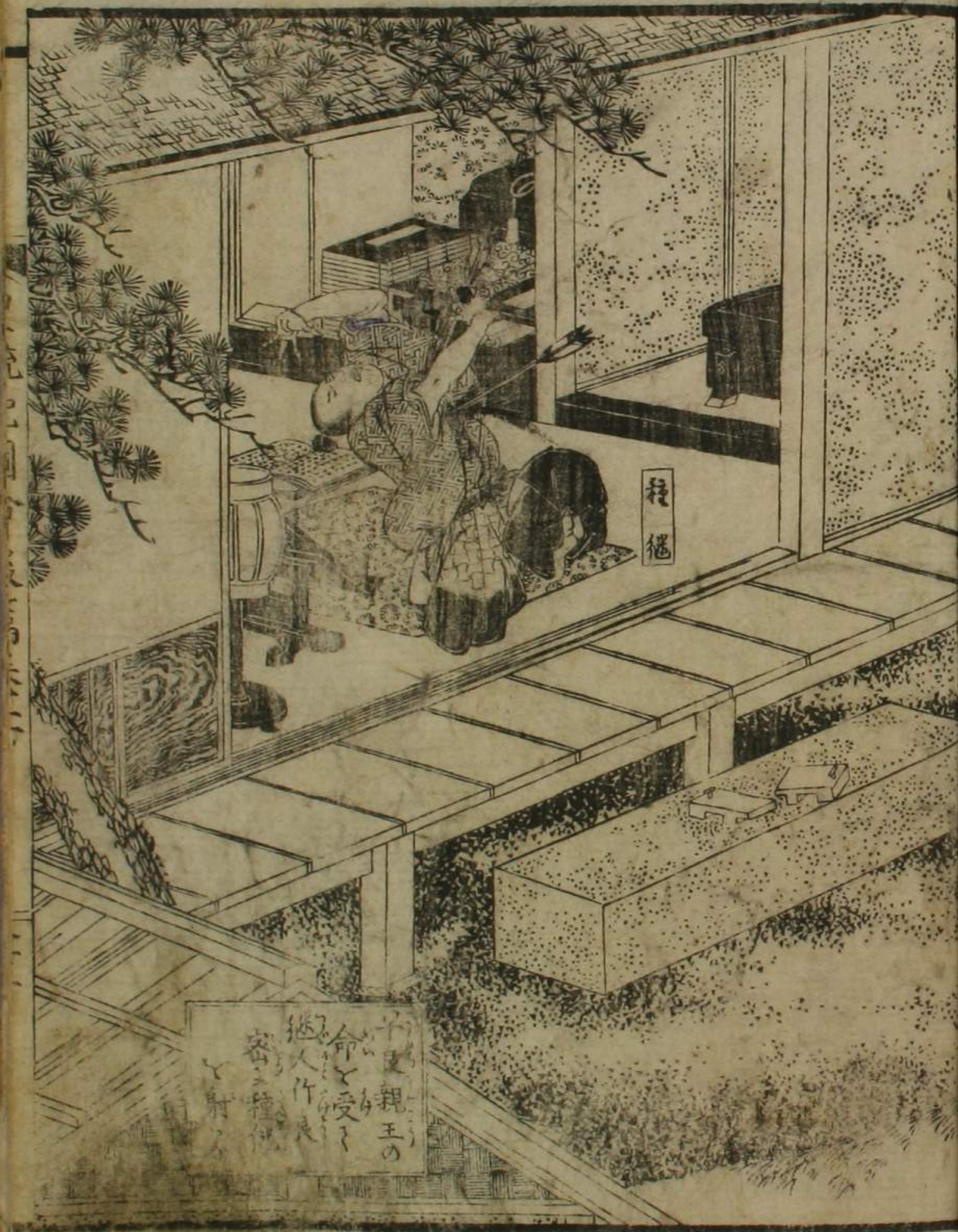
帝の睿覽みこみ小備こびられれた。君脚覽きみかかみありて睿慮みこりよ小合こあひひ急いそぎ其地そのち小宮こみや經營けいぎやうとををと勅詔みことのり下りくだりり西卿さいしやうより木きの頭かぶ修理職しゆりしやく中ちゆう渡わたり六月ろくがつ中旬ちゆうしゆうより五幾いご七道しちだうの人夫ひとぶを召取めいとり土つちを運たび石いしを曳ひ良ら技ぎ緒物じよぶつと集あめて日ひを分わかかせと修理しゆりをを励いたせ造營ぞうえいと急いそぎぎ程ほど小冬こふゆ十月じゅうがつ小及こおよびび早くも宮殿みやてん殿てん宇う成なり就つくも其由そのよし奏聞そうもんしし帝睿慮みこりよ嚴げんしく參議さんぎ近衛ちかべ中將ちゆうしやう紀船守きふねのりと勅みことのりしし使つかして山背國やまのくに賀茂かもち上下じやうじやうの神社しんじや敬きやうて奉ほうり遷都せんとの義ぎを明神みんじん小告こつせせ是賀茂このかもちの神社しんじや山背國やまのくに鎮護ちんごの神かみ故ゆゑと奉幣ほうへい相あひひ奉幣ほうへい相あひひ十月じゅうがつ最上さいじやう吉日きつじつと擇えらび桓武天皇げんぶてんかう女御によみ后妃ごひ緒親じよのちか王公わうこう御百官ごひやくくわんと將まさり平城へいじやうの都みやこと脚あし裝ま駕が在あり長岡ながのの新都しんと臨幸りんしやうしし遷都せんとの規式きしきを執行しやうぎんせせ小依こよて百司ひやくし百官ひやくくわんととちち士農工商しにうこう大半たはん平城へいじやうより新都しんと居ゐるを授まりり忽たちち不時ふじの發動はつどう起おりり其その亂根らんこんを尋たづねね今度こんど新都しんとの地形ちやうけいを見み立たてる中ちゆう

納言種継のうごんしゆけいととり前左大臣まへざだいにん良経らうけいの嫡男ちやくなん正三位せいさんゐ宇合うがひの孫まご小こ家柄けあへとといひ君きみの御覽みまへ他た小越こしや芽出めだすす權勢けんせい肩かたを並ならべべ人ひとももああららずず然しかし帝みかど常じやう小遊あそばを好このむむ朝あまの政まつりごと數かず多おほく皇太子すうたいし早良親王さらちか小こ女によのの御み遊あそば種継しゆけいのの電でん臣しんああれれ平へい日にち君きみ小こ昵ぢか近ぢか内外ないがいの政まつりごと吏しと執しやう奏そうしし威い勢せい猶なほ早はや良ら太子たいし小こ踰これれ早良親王さらちか甚おほくく心こころ種継しゆけいをを品しんのの彼か君きみ電でん小こ鑄そり我意われいの行ゆき条じやう多おほくく嫉あやみみ憤いりりのの隙ひまももああららずず種継しゆけいと追退おひきんんのの時ときと窺うかがひひひひ小其頃ここのころ位ゐ伯はく氏し今いま毛人けしんととり者もの親王ちか小こ阿ありり搜たひひ脚あし意い小こととり入いれれ親王ちかも今いま毛人けしん月つき願ねがふふ思おもひひ彼かをを參議さんぎの官くわん任まんんと其由そのよしと帝みかど奏そうししのの由よしととりり遮さり抑おさへへ佐伯氏さへくし參議さんぎ小こ昇進しやうしんををなな家柄けあへももああららずず此この義ぎハ勅許みことのりなりなりととりりととりり奏そうしし帝みかどもものの義ぎ小こ思おもひひ今いま毛人けしん參議さんぎ小こ昇進しやうしんのの義ぎ也なりととりり上かみ日ひ親王ちか勅詔みことのりなりなりのの由よし是こゝ小依こよて親王ちかの思おもひひ齒は語ご本ほん意いと失あははれれひひひひ

皇紀卷之百一十五 聖德太子本紀 七十一

種継が方妨るところなりとて御悪し益強く如何も種継を追退人と人を  
て種く絶つとらま悪き多小奏聞させられぬ帝更小信用いふと刺し是より  
朝政を太子小任せむと種継と商議しめて萬機の政更と定めりて親  
王の御勢ひ追く薄らげ種継が權勢ハ日小増長し親王いふ無念小思  
日且多憤怒のみの小心を焦しめたる小延暦四年八月桓武天皇奈良の御者  
御幸かゝり更右名を早良親王是と定免竟の時節とて兼ては意乃  
公卿大伴種人大伴竹良二人を密小招た此時を過さば種継を討て捨と捨  
りて二人仰を承りて弓矢を携へ種継の邸舎暗小潜入る其頃遷都の砌  
小公卿の家造も皆いさ同疎かりぬ二人裏の堀を乗踰て易くと忍び入  
陰小種継が居間忍び行窺ひぬ種継は手小刺客の忍び入りと  
あつと燈の下小書と用なく孰見居るあ仕をりたると種人竹良とも弓

ヤウチ番て日時小切て放りたる小過と種継の咽論と胸の正中といふ射  
串りたる二所とも急所の手ぬれ何と堪ぬ苦と一声叫び伏せ免首小  
倒ま伏せりて二人も心悦び逸足小逃退去々種継が妻ハ斯ともあつと  
何更おや人の叫び声のまえと怪と行てる小夫種継ハ急所ハ二筋の矢を射  
付られ免首小伏居りたる小是ハいふと大子殺死急小家内の男女を呼集り  
先夫を扶け起し矢を抜捨てみ抱りたる小大更の手ぬれを言句と幾と更も  
能つと其夜の曉頃小終小空しく成おたる羊齡四十九才かりたる妻小親族寄  
集りて悲歎とも更限か何かも悪黨の所為なりと穿綴されぬ更小  
敵を知ぬ便もかく先帝奏せむと有酒とむと平城へ急馬をよせて種  
継の横死せし趣を奏りぬ帝大子殺せむの急小密筆と長岡の新  
都へ還りぬ電臣の種継たれを御哀悼の勅使を遣されせむと亡魂を慰



十王親王の  
命と受く  
種人竹良  
密に種



皇統記圖會傳卷二

九二





を修ずりゆりも救てその功かく弥雨降む田畑とも小乾れ割生民渴魚の轍乃水  
小息つがてり。帝深く歎せり。群臣を召れり。勅詔を以て。昔殷の湯王  
の代。七年。同。年。每。小。旱。して。五。穀。登。る。吏。か。天下。飢。饉。小。困。餓。死。する。者。多  
く。これ。湯。王。是。を。歎。れ。自ら。栗。林。の。野。外。に。い。り。新。を。積。で。其。中。小。車。を。立。六。つ。乃  
罪。を。乞。ふ。身。小。り。て。天。意。小。通。く。と。ち。あ。む。朕。身。を。牲。小。り。雨。を。降。り。幸。か  
た。民。を。救。ひ。い。り。祈。り。積。る。新。火。を。う。け。り。を。天。其。誠。心。を。感。ず。り。火  
い。ま。新。火。燃。え。り。以前。不。忽。ち。天。雨。降。り。早。魃。の。患。を。救。ひ。り。と。我。朝。の。古。も  
文武。天皇。彼。湯。王。小。あ。ひ。自身。雨。を。祈。り。万。民。を。救。ひ。り。天下。早。して。生。靈。悩  
困。む。吏。早。良。太子。の。怨。靈。の。あ。と。所。を。風。説。と。れ。も。恐。く。八。眠。が。不。徳。を。天  
より。責。め。り。と。ち。わ。た。す。依。て。朕。も。文武。帝。の。先。蹤。を。追。て。雨。を。祈。り。思。へ。り。御  
等。其。儲。を。む。せ。り。と。紹。命。あ。り。り。緒。臣。下。君。の。御。仁。徳。を。感。ず。り。領。堂。一。て

急だ禁中の庭上祈雨の靈壇を築き注連を張四半及び切四万小四神の旗を  
立其餘種々の供物を調用意全く備りしを帝浄衣を著り密冠を正  
して壇上登りの上天を拜し丹絨を凝と雨を祈り壇下の庭小三公九  
卿もあ諸卿百官列座してとも小天を拜して雨を祈り小天感堂一々半  
日むり過り。さき。空。雲。東。西。より。起。り。天。須。臾。の。うち。小。霧。曇。り。一。陣。の。風。吹  
幾。ろ。と。ひ。く。膏。雨。大。小。降。出。と。盆。を。傾。る。が。如。く。あ。れ。を。帝。龍。顔。慮。く。天  
恩。を。拜。謝。し。り。宮。中。還。り。せ。り。群。臣。も。万。歳。を。唱。慶。賀。し。り。退  
出。り。り。斯。て。大。雨。降。吏。三。日。三。夜。小。止。も。ふ。り。り。活。る。井。泉。も。湧。上。り。竭  
る。河。水。も。漲。り。流。る。諸。國。の。乾。地。潤。は。り。と。所。あ。ら。む。万。民。跳。り。舞。て。大。小  
悦。び。帝。の。聖。徳。を。仰。ぎ。尊。む。此。君。の。御。壽。命。百。千。年。も。久。し。く。祈。り。去。程。小  
早。魃。の。患。止。む。れ。帝。も。臣。下。小。勅。り。り。早。良。親。王。小。崇。道。天。皇。と。益。を







日枝山の林下の神社に一七日参籠す。丹城を凝して子を授けんと祈る。其誠心を神明感納し、いん程かく其妻妊娠し、称徳天皇の神護景雲元年丁未三月男子を生り、是則ち最澄なり。小児の頃より智才尋常の小児小勝を七歳より佛書儒書小涉獵し、佛法を慕ひ、十二歳の時大安寺の行表法師を戒師とす。のり剃髪して法名を最澄と号す。唯識を学ばず、華嚴經起信論ホを学ばず、突稍博識の安ん高し。桓武天皇の御飯依小預り比叡山を用基し、天台宗の始祖とかり多む。最澄曾て鑑真禪師の傳する玄義文句止観四教義維摩經の疏ホを聞くと歡喜し、猶一切衆生を化導せん。深理明師の傳授無てハ意の如くありとて、入唐の望を起し、帝ハ款券し、之を即ち勅許ありて、延暦二十二年遣唐使藤原葛野原の船小釋空海大論ととも、小月船して唐土へ。こころ台州の天台宗入り、國清寺の道邃法師小相見して、一心三觀の玄旨を

授り、且菩薩三聚の大戒を付囑せし、其より天台山の西南佛隴寺の行滿座主小見て佛法の問答あり、小行滿大ハ感ず、昔智者大師徒弟小經曰、我滅後二百余歳の後東海の國小生、彼土ホ佛法を興せんと遺刻ありと傳聞し、果して今最澄三藏を相見、更もと悦びて六祖妙樂大師より代秘藏せる經論書卷を惜みず、及く最澄小附与し、汝此法文と日本持還り法燈を挑け、一宗の祖師とあはせと示され、最澄其後越明の龍興寺いり、順曉阿闍梨小對面して三部灌頂の密教を受、又唐貞觀の沙門脩然小錫して達磨の一派牛頭山の法を受傳られ、素素り最澄日本より行表和尚より、北京神秀の禪法を學得し、亦脩然と問答して、禪の要義と尋求の頗る領解する所あり、悦み、斯く其次に幸遣唐使歸朝あり、舟より船として出帆せし、此時空海、猶唐土に留る、其後唐

二十四年の夏、歸朝し八月、小京師へ入参内ありて龍顔と拜し唐の法華經の  
 の経論疏記二百三十余部并五百卷を金字の法華經に  
 智者大師の禪鎮白角如意等と献せられ多を帝大に唐感在に最  
 澄が入唐して天台の緒典籍を授りて歸し佛法興行すりて此類を  
 功なりとて國師号と給り彼諸典籍天下に流布せり村中の上紙を  
 給りて和氣私命せし学生の能書と集て寫させのひり斯て最澄に  
 信丹紙を凝して天台派を世に弘ち後嵯峨天皇の弘仁十三年二月帝乃御  
 宸翰小く傳燈法師の紀を賜り同年六月遷化せられり壽五十六也之  
 最澄著述の書多し人皇五十六代清和天皇の貞觀八年八月傳教大師  
 と謚号と賜りたり天台宗の末世にて敏承昌する偏不此大師の法徳小する  
 扶桑皇統記後篇卷之一終

所たりたり

